

同志社大学文化学会文化学年報投稿 標題部5行, 図版110mm×165mm

横組 35字/行×27行/面×24面 =945字×24面 ≒400字/枚×56枚

万葉集卷第十九の和歌表記の漢字 Kanji with Kana in *Man'yōshū vol.19*

石井 久雄

1 問題

万葉集卷第十九は、和歌の表記のうえで、仮名主用と和訓主用との双方の性格を併せ持つとされる。仮名主用表記巻の和歌の表記における漢字の様相は、この巻第十九のほかは、「万葉集における仮名と漢字」(2013年, 同志社国文学 78 所載) および「同(2)」(2014年, 同志社国文学 80 所載) で記した。ここでは巻第十九の和歌の漢字を取り上げる。

ここに、一字で一拍に対応するものを仮名と言うこととして、漢字と言うのは、仮名を除くすべてである。正訓による「春<はる>」(4139)、義訓による「京師<みやこ>」(4142)、借訓による「夏借<なつかし, 懐>」(4181)や、漢文の語順を訓読する「将哭<なかも>」(4148)などのものがある。「日<ひ>」(4142)など、仮名とも一拍の正訓とも理解できるものは、漢字とする。「叔ら河<しくらがは>」(4189.19)には、字音による漢字「叔」がある。「足ひ木<あしひキノ>山河<やまかは>阻<へだて>」(4214.13) および「山跡<やまとノ>国<くに>を」(4254.2)の「木」「跡」は、単独で取り出すならば仮名と見るのが妥当であろうが、ともに読み添え「ノ」があり、読み添えは直後にも漢字が置かれた漢字に行われると見て、漢字とする。「住吉<すみノユ>」(4243, 4245)「墨吉」(4245)の「吉」も、直前に訓み添え「ノ」があることにより、漢字とする。助詞「が<之>」「の<之>」「は<者>」「ば<者>」「や<哉>」「て<而>」を記したく>内は、仮名とする。助詞「ゆ<従>」は、日本語の語順による「我門従<わがかどゆ>」(4176)、「初時従<はじめノトキゆ>」(4214.2)で仮名とし、漢文の語順による訓読「従古昔<いにしへゆ>」(4166.17) (4254.27)で漢字とする。こうした、仮名と見るか漢字と見るかという問題は、

本稿の主題の基礎に横たわり、折おりに例を加える。

万葉集は、漢字本文・訓み下しとも、澤瀉久孝『萬葉集注釋』全20巻（1957－1968年、中央公論社）、およびその『本文篇』（1970年）・『索引篇』（1977年）による。和歌は、詞書・左注などを含まないとともに、「一云」などで示される異文等も含まない。

挙例に当たっては、仮名は平仮名で記す。ただし、乙類音に対応すると考えられるものは片仮名により、かつハ行・バ行エ列を「フ・ブ」と表し、なおヤ行エ列を「ユ」と表す。清音・濁音への対応を、澤瀉に従って区別する。仮名の反復符号は、対応の甲類音・乙類音を顧慮せず、「ゝ」「ゞ」とする。漢字は、異体を整理したうえで、漢字そのままに記す。反復は「々」とする。所在は、すぐ上の（ ）内のように、旧国歌大観番号で示し、長歌ではピリオドを置いて句順も示すことがある。必要に応じて、漢字の訓み、ないし仮名の原文や注記を、〈 〉に括る。上の漢字の事例もこの方針に従っている。

2 文字の総量

万葉集巻第十九は和歌154首を収め、短歌131首および長歌23首である。片歌に仏足石歌を継いだ珍しい形式であると澤瀉が言い、韻律が独特であると諸家も言う4227番歌は、直後に4228番反歌があることでもあり、長歌のうちに含めている。和歌を引用するには、国歌大観番号を冒頭に置く。

4227 大殿〈おほトノ〉ノ 此廻〈もトほり〉ノ 雪莫踏〈なふみソ〉ね

数〈しばしば〉も 不零〈ふらぬ〉雪ヅ 山耳〈ノミ〉に 零〈ふり〉し雪ヅ

ゆメ縁勿〈よるな〉人や 莫履〈なふみソ〉ね雪は

4228 有つゝも 御見〈めし〉たまはむヅ 大殿ノ 此もトほりノ 雪なふみソね

万葉集巻第十九の和歌を記した文字は延べ5,716字であり、短歌・長歌に分けても見るならば、次のようである。漢字比率は、文字延べに対する漢字延べの百分率である。短歌・長歌ごとに、一首の文字数・漢字数それぞれの最小・最大を範囲として示し、また平均を示す。なお、本稿全体にわたって、数値の

下位の示さないところは切り捨てている。

	全体	短歌	長歌
文字数 異なり	649	493	510
延べ	5716	2965	2751
一首範囲		16-32	34-235
平均		22.63	119.60
漢字数 異なり	566	410	429
延べ	2341	1259	1082
比率	40.95	42.46	39.33
一首範囲		0-16	0-125
平均		9.61	47.04
仮名数 異なり	83	83	81
延べ	3375	1706	1669
一首範囲		3-32	13-153
平均		13.02	72.56

歌の数として見るならば、短歌：長歌=131首：23首=1：0.17，すなわち短歌の1/6程度の長歌の分量であるが、それを記した文字の数として見るならば、短歌・長歌に差がないと言ってよく、延べで 2965字：2751字=1：0.92 であり、漢字あるいは仮名で見てもその周辺の数値 1259字：1082字=1：0.85 ないし 1706字：1669字=1：0.97 である。しかも、漢字の異なりで短歌を長歌が上回り、410字：429字=1：1.04 である。

上の数値の事例となる和歌を挙げる。短歌の平均値は、文字数22・漢字数9 または文字数23・漢字数10 といったところである。ここでは、字数の見通しをよくするために、原文の漢字仮名交じりを左に示して、読みを一首全体について右にまとめ、また、歌の末尾に文字数・漢字数を示す。

4260 皇は 神にし座ば <おほきみは かみにしませば
赤駒ノ 腹ばふ田ゐを あかごまノ はらばふたゐを
京師トなしつ みやことなしつ> (文字数22, 漢字数9)

4261 大王は 神にし座ば <おほきみは かみにしませば
水鳥ノ すだく水ぬまを みづとりノ すだくみぬまを
皇都ト成つ みやことなしつ> (文字数23, 漢字数10)

巻頭を飾る短歌は文字数が最小16である。漢字数が最大16の短歌も並べる。

4139 春苑 紅にほふ <はるノソノ くれなゐにほふ

- 桃花 下照道に もものはな したでるみちに
 出立嬢孀 いでたつを ため> (文字数16, 漢字数12)
- 4143 物部ノ 八十嬢孀等が くもノノふノ やそを ためらが
 把乱 寺井ノ 於ノ くみまがふ てらゐノ うフノ
 堅香子ノ 花 かたかごノ はな> (文字数21, 漢字数16)

長歌で、平均値に近いものとして、27句で構成された次を挙げる。

- 4266 あしひキノ 八峰ノ うフノ <あしひキノ やつを ノ うフノ
 つがノ 木ノ いや 継々に つがノ キノ いや つぎ つぎに
 松根ノ 絶事なく まつがねノ たゆる コトなく
 青丹ヨシ ならノ 京師に あをにヨシ ならノ みやこに
 万代に 国所知ト ヨロヅヨに くにしらさむト
 安み知し 吾大皇ノ やすみしし わがおほきみノ
 神ながら おもほしめして かむながら おもほしめして
 豊宴 見す 今日 は トヨノ あかり めすけふノ ひは
 もノノふノ 八十伴雄ノ もノノふノ やそ ともノ をノ
 島山に あかる 橘 しまやまに あかる たちばな
 うずに 指 紐 解放て うずに さし ひも ト き さ ケ て
 千年ほき ほきトヨもし ちトせほき ほきトヨもし
 ゑらゑらに 仕奉を ゑらゑらに つかフ まつるを
 見が 貴者 みるが たふとさ> (文字数118, 漢字数47)

この4266番長歌一首に漢字・仮名の扱いの問題が幾つか浮き出ているので、書き留める。8句「なら<奈良>」は、漢字表記が「寧楽」とともに定着しているであろうが、一字一拍であるので、このように仮名であるとする。11句「知」は、枕詞「やすみしし」の原表記「八隅知之」を、澤瀉(注釈巻第一 3番歌訓釈 p.60)が語源解釈に基づくとしたのに従って、漢字仮名交じり「八隅知し」とし、その「知」をここにも適用して漢字とするものである。末句「者」は、助字に措いたとする澤瀉に従って、漢文の漢字であるとする。

短歌と長歌とは、一首の長さが異なるから、一首ごとに文字数・漢字数を見るならば、当然に数値が異なる。一首が幾字で記され、そのうちに漢字が幾字あるか、ということを経絡して、文字数幾つのもので幾首あり、そのうちで漢字数幾つのもので幾首あるか、という表を作るならば、次ページのようになる。短歌と長歌とを一つの表とすることもできるが、紙幅の無駄を省くために、また見やすさのために、分離する。短歌と長歌とは、重なるところが漢字数0の関係部分のみであり、綺麗に分離できる。長歌の表も、全体の言わば左上と右下とのみで済むので、分割する。

短歌の表の左上の部分を読むならば、全部で131首、漢字数0のものが4首、漢字数1のものは見られず、漢字数2のものが1首、……、一首の文字数が32のものが2首あって、ともに漢字数0であり、文字数31のものも同、文字数30のものはなく、文字数29のものは2首、漢字数2および4であり、……、である。短歌では文字数が多いものを上に配列し、長歌では文字数が少ないものを上に配列して、逆であるが、それで見やすいと感じた措置である。

短歌での平均値は、文字数22・漢字数9または文字数23・漢字数10のあたりであるが、中央値・最頻値は少しずれる。中央値は文字数のみで見て22、漢字数のみで見て10である。最頻値は、文字数のみで見て23ないし21、漢字数のみで見て11ないし12であり、組み合わせて見るならば、平均値に合致する文字数22・漢字数9、および文字数21・漢字数12などである。これらの数値の例を挙げる。

- | | | |
|------|-------------|-------------------------|
| 4247 | 天雲ノ ソキヘノきはみ | くあまくもノ ソキヘノきはみ |
| | 吾念有 きみに将別 | わがもへる きみにわかれむ |
| | 日近成ぬ | ひちかくなりぬ> (文字数22, 漢字数10) |
| 4173 | 妹を不見 越国べに | くいもをみず こしノくにべに |
| | 経年ば 吾情どノ | トしふれば わがココロどノ |
| | なぐる日も無 | なぐるひもなし> (文字数21, 漢字数11) |
| 4178 | 吾耳 聞ば不怜も | くわれノミし きケばさぶしも |

短歌	漢字	0	2	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
文字	131	4	1	3	6	8	7	12	15	12	22	19	14	6	1	1
32	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
31	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29	2	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28	3	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
27	3	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
26	8	-	-	-	-	1	4	1	1	1	-	-	-	-	-	-
25	16	-	-	-	3	3	1	2	1	-	3	2	1	-	-	-
24	9	-	-	-	1	2	-	1	1	3	-	1	-	-	-	-
23	19	-	-	-	-	-	-	4	3	4	3	3	2	-	-	-
22	17	-	-	-	-	1	1	-	5	2	4	1	1	2	-	-
21	18	-	-	-	1	1	-	1	-	-	3	5	5	1	-	1
20	11	-	-	-	-	-	1	-	2	-	4	1	3	-	-	-
19	8	-	-	-	-	-	-	1	-	2	2	-	1	2	-	-
18	11	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3	5	1	-	1	-
17	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
16	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-

長歌	漢字	0	21	28	31	33	35	37	下部の：は上部に加算している							
文字	23	2	1	1	1	2	1	1								
34	1	-	1	-	-	-	-	-								
56	1	-	-	-	-	-	-	1								
59	1	-	-	1	-	-	-	-								
68	1	-	-	-	-	1	-	-								
91	1	1	-	-	-	-	-	-								
93	1	-	-	-	-	-	1	-								
100	1	-	-	-	-	1	-	-								
109	1	-	-	-	1	-	-	-								
	漢字	0	41	44	46	47	50	51	55	63	65	83	89	125		
文字	：	：	1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1		
85	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
112	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
118	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
120	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
121	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
122	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
128	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
153	3	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-		
172	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-		
176	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
235	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		

霍公鳥 にふノ山辺に ほトトぎす にふノやまへに

い去鳴にも いゆきなかにも> (文字数21, 漢字数12)

さて、文字数・漢字数が平均値あたりのものにせよ、中央値・最頻値あたりのもにせよ、その和歌の漢字は、必ずしも和語に引き当てやすくはないと認めておきたい。例えば、平均値のあたりとして挙げた2首4260番歌・4261番歌は、両者を照らし合わせても、「京師」「皇都」を「みやこ」と訓むには注釈が必要であろうし、「座ば」を「ませば」と訓むにもそうであろう。「水鳥くみづとり>」「水くみぬま」の「水」の読み分けも、暫しとまどうであろう。短歌の文字数・漢字数は、字余りがあったとしても、音数より漢字数が多いことがあったとしても、最大の可能性は35程度であろうから、数値がさほどは散らばらないが、中央値・最頻値が平均値にちかいことは、分布が綺麗であることを示唆している。漢字数が平均値より大きくて簡単には語形全体が知られない短歌が、半数程度あると、まずは物語られている。漢字の分量がどの程度であれば理解しやすく、すなわち仮名主用表記であると見られ、そのときの漢字はどのようなものであるか、それが問われることになる。

3 仮名主用部分における漢字

万葉集巻第十九が仮名主用と和訓主用との性格を併せもつことにつき、古屋(1998 pp.42-45)は、漢字を用いない純粋な仮名表記を3群6首に見て、

- ・ 4209番長歌 (文字数 91) ・ 4210番反歌 (文字数 31)
- ・ 4220番長歌 (文字数153) ・ 4221番反歌 (文字数 32)
- ・ 4222番短歌 (文字数 31) ・ 4223番短歌 (文字数 32)

を挙げる。この6首は、上の文字数×漢字数の表にも、漢字数0として挙がる。念のため、最初の2首を示す。

4209 たにちかく いへはをれども コだかくて さとはあれども
ほトトぎす いまだきなかず なくコゑを きかまくほりト
あしたには かどにいでたち ゆふへには たにをみわたし

こふれども ひとこゑだにも いまだきこユズ (文字数 91)

4210 ふちなみノ しゲりはすぎぬ あしひキノ やまほとトギス

なドかきなかぬ (文字数 31)

仮名主用表記と言って漢字をどの程度まで含ませうるかということは、聊か面倒な問題であるようである。分量の問題として石井(2014)で見るならば、仮名主用表記巻の短歌の漢字は概ね次のようであった。

	巻 5	巻14	巻15	巻17	巻18	巻20
短歌数	104	230	200	127	97	218
文字延べ	3152	7178	6155	3751	3001	6713
漢字延べ	115	187	238	326	101	165
漢字比率	3.6	2.6	3.8	8.6	3.3	2.4
漢字異なり	91	60	79	159	47	76
一首文字数	18-33	29-34	27-33	24-33	21-33	24-33
平均	30.3	31.2	30.7	29.5	30.9	30.7
一首漢字数	0-12	0-5	0-5	0-7	0-10	0-6
平均	1.1	0.8	1.1	2.5	1.0	0.7
漢字数0の歌数	78	122	83	30	49	147

これに対して、巻第十九の短歌の漢字比率は10倍以上であり、巻第十七で数値が大きい、それに比べても5倍である。すなわち、巻第十九全体の平均の漢字比率は、既に示したように42.46%であり、文字数22・漢字数9=40.90%、文字数23・漢字数10=43.47%としても見ることができる。中央値は文字数22・漢字数10であるとするならば45.45%である。このような漢字の比率では容易に訓み得ないと、上に見たところである。一首当たりの漢字数について見ても、当然ながら、比率と同様である。

仮名主用巻の短歌で漢字が少ないことを支えているのは、ここの表に添えたとおり、漢字数0の歌数が多いことである。巻第五・第十四・第十八・第二十でそれぞれ短歌全数の過半を占めて、ただ、巻第十五で漸く40%を超えたあたりであり、巻第十七で1/4に届かない。巻第十九では漢字数0の短歌は4首、短歌全数131首の3%というところである。漢字数が少ないほうから短歌全数の半分を取り出すと、文字数・漢字数の中央値10に達し、その短歌が訓み難いことは今も繰り返して言った。

漢字比率を適当に採って20%以下とし、該当する短歌を次に列挙する。漢字数 1以上でこの条件を満たすものは、8首である。

4262 韓国<からくに>に ゆきたらはして かへりコむ ますらたけをに
みきたてまつる (文字数29, 漢字数2, 漢字比率6.8%)

4263 梳<くし>も見じ 屋中<やぬち>もはかじ くさまくら たびゆくきみを
いはふともひて (文字数29, 漢字数4, 漢字比率13.7%)

4278 足ひキノ やました日影 かづらける うフにやさらに 梅をしのはむ
(文字数28, 漢字数4, 漢字比率14.2%)

4291 わが屋どノ いささ村竹<むらたけ> ふく風ノ おトノかそケき
コノゆふへかも (文字数28, 漢字数4, 漢字比率14.2%)

4292 うらうらに 照<てれ>る春日<はるひ>に ひばりあがり
情<ココロ>悲<かなし>も ひとりしおもフば
(文字数27, 漢字数5, 漢字比率18.5%)

4190 叔<しく>ら河 湍<せ>を尋<たづね>つつ わがせこは うかはたゝさね
情<ココロ>なぐさに (文字数25, 漢字数5, 漢字比率20.0%)

4279 ノト河ノ 後<ノちに>は相<あは>む しましくも 別<わかる>トいフば
かなしくも在<ある>か (文字数25, 漢字数5, 漢字比率20.0%)

4280 立別<たちわかれ> 君がいまさば しき島ノ 人はわれじく
いはひてまたむ (文字数25, 漢字数5, 漢字比率20.0%)

多少でも訓みにくそうである漢字に、訓の注を入れた。余計な注であると感じられるところもあるであろうが、語形を確定しながら訓む漢字の分量としては、このあたりが限度かと思われる。短歌一首当たり漢字数 5 というのは、一句当たり 1 ということでもある。

ついでをもって、漢字比率20%以上であるが漢字数5である短歌2首を挙げる。

4287 鶯ノ 鳴<なき>しかきつに へほへりし 梅<うメ>此<コノ>雪に
うつ口ふらむか (文字数24, 漢字数5, 漢字比率20.8%)

4284 新<あらたしき> 年<トシノ>始<はじめ>に 思共<おもふどち>

いむれてをれば うれしくもあるか

(文字数21, 漢字数5, 漢字比率23.8%)

漢字数21以上の長歌一首で漢字比率が最小であるのは、次の28.4%＝漢字数31／文字数109 である。

4164 ちちノ実ノ 父ノみコト ははそ葉ノ 母ノみコト おほロかに
情<ココロ>尽<つくし>て 念<おもふ>らむ 其<ソノ>子なれやも
大夫<ますらを>や むなしく 可在<ある>ブき 梓弓 すゑふりおコシ
投矢<なげや>もち 千尋射わたし 剣刀<つるぎたち> コしにトりはき
あしひキノ 八峰<やつを>ふみ越<こユ> さしまくる 情不障<さやらず>
後<ノちノ>代ノ かたりつぐづく 名をたつづしも

漢字比率20%以下の短歌の数は、漢字数0の4首を含めて12首に過ぎず、漢字数5以下の短歌の数というように拡張しても14首である。短歌全数131首の1割前後である。巻第十九の仮名主用表記の特徴は、漢字の分量から見る限り、漢字数0の短歌4首・長歌2首に限られ、巻第十九全体を仮名主用表記巻の一と扱うことは、無理である。

古屋 (1998 pp.1-2) は、巻第十九を和訓主用表記巻の一として、その一群のうちでは、唯一、付属語・自立語の仮名表記も目立ち、また訓仮名がほとんど現れないと指摘する。古屋が指摘するその特徴は、巻第十九を仮名主用表記巻と主張する側から見れば、主張の根拠になるものである。漢字というものをとおして、その特徴の一端を見ることとする。

4 和訓主用表記部分における漢字

仮名主用表記ということは、巻第十九においては、結果的に、一首のうちで漢字数0である短歌・長歌に限定されることになり、したがって、巻第十九の漢字を取り上げることは、和訓主用表記における漢字を扱うことにほかならなくなる。そうして、出現する漢字に短歌と長歌とで分量の違いがあることは、既に見ている。延べは短歌において多く、異なりは長歌において多かった。

短歌と長歌との双方に共通して出現する漢字は273字であり、多少の異同を差し置いて大掴みに見るならば、短歌・長歌それぞれの異なりの65%前後である。しかも、その出現頻度を合計するならば、80%前後になる。短歌あるいは長歌の一方にしか出現しない漢字は、異なりでは35%前後であるが、出現頻度の合計では漸く20%である。

		全体	出現する範囲			
異なり	短歌	410	長歌にも	273 (66.5%)	短歌のみ	137 (33.4%)
	長歌	429	短歌にも	273 (63.6%)	長歌のみ	156 (36.3%)
延べ	短歌	1259	長歌にも	1055 (83.7%)	短歌のみ	204 (16.2%)
	長歌	1082	短歌にも	865 (79.9%)	長歌のみ	217 (20.0%)

短歌と長歌とを分離し、それぞれの漢字を出現頻度で排列すると、次の見開きである。出現順位、累積千分率を添える。短歌のほうを左上から読むと、出現順位1は頻度29であって、そこまでの累積比率は23.0‰=29字/漢字延べ1259字であり、漢字は1字のみ「吾」である。順位2は頻度28、累積比率45.2‰=(29+28)/1259、1字「見」である。順位3は頻度19、漢字2字「公・不」であり、累積比率75.4‰=(29+28+19×2)/1259である。次は順位5として、上に(順位-1)者ある次に位することを示し、同頻度・順位で5字あって累積比率146.9‰=(29+28+19×2+18×5)/1259である、……。異なり411字の高頻度上位約5%の22字で延べの29.15%を占め、異なり約16%の上位64字で延べの過半51.07%を占める、……。出現頻度1の漢字が、表から算出するならば、異なりの半数に近い44.2‰=(411字-229字)/411字を占める。というようになる。

短歌と長歌とで、漢字の出現頻度の分布に多少の違いが見られる。すなわち、短歌では、最大値29であり、出現頻度10以上の漢字が24字あるのに対して、長歌では、最大値21、出現頻度10以上の漢字が12字である。平均値は短歌で3.07、長歌で2.52、中央値は短歌で2、長歌で1であって、全体的に、短歌のほうの数値が大きい側に偏る。同一漢字が繰り返し使われる度合いが、短歌で強めであるということである。ただし、四分位値は長歌でも短歌でも3および1である。

漢字一覽

(常用漢字表準拠排列。数値は短歌・長歌での出現頻度)

愛	1	覺	1	形	1	子	55	春	97	清	4	知	55	馬	21	乏	1	恋	55	此	136
安	13	隔	1	啓	1	止	11	初	31	盛	23	置	11	梅	8	忘	2	路	1	泝	1
衣	1	獲	1	經	41	仕	21	所	65	石	22	竹	2	白	43	木	36	露	4	涕	1
為	71	樂	2	携	2	四	13	緒	22	赤	11	中	22	泊	11	墨	1	勞	1	渚	1
違	1	干	1	繼	25	矢	11	諸	1	昔	22	昼	1	船	45	本	21	浪	24	滯	1
遺	1	官	1	雞	2	刺	2	如	68	惜	13	著	1	八	411	每	33	灣	1	湍	21
一	2	卷	11	月	58	始	53	小	23	跡	11	長	2	髮	1	妹	42	云	22	灼	1
引	43	看	1	見	2821	枝	12	床	11	積	2	張	1	伴	2	枕	11	倭	1	鳥	1
印	1	貫	15	肩	1	思	33	尚	12	折	52	鳥	1811	坂	2	末	1	儲	1	燕	1
因	1	間	26	劍	1	指	11	松	13	設	1	朝	55	繁	310	万	32	其	1	燭	1
飲	11	漢	1	堅	1	師	13	將	156	雪	154	超	33	比	1	滿	1	剋	1	爾	2
隱	1	管	1	遣	21	視	1	消	11	節	1	潮	1	彼	21	未	1	勿	12	獸	1
羽	31	還	32	懸	1	嗣	1	唱	1	絶	11	直	1	飛	3	無	23	卿	1	瑞	1
雨	1	韓	2	言	27	飼	21	照	43	千	44	朕	1	悲	43	夢	1	吾	299	盈	1
浦	41	眼	2	弦	1	賜	5	障	1	染	3	鎮	11	尾	1	霧	21	哉	1	眷	1
雲	44	氣	1	原	1	寺	1	衝	11	船	12	通	11	眉	1	名	12	哭	2	磐	1
榮	11	記	1	戸	92	次	1	上	33	潛	2	痛	1	姬	1	命	3	啼	1	礪	11
影	51	起	1	古	13	耳	35	城	1	然	1	爪	1	百	2	明	23	喧	97	袴	1
益	2	婦	2	呼	2	似	2	淨	1	祖	1	底	2	表	1	鳴	185	夷	13	紐	1
越	41	幾	2	五	31	兒	21	常	63	阻	1	庭	11	標	2	面	2	孀	25	袿	1
延	11	貴	22	後	42	事	24	情	77	壯	2	停	1	浜	31	綿	1	寐	22	臥	1
怨	1	吉	12	語	14	治	2	孃	24	早	22	天	710	不	1912	網	1	寤	1	苑	3
宴	1	客	1	公	197	持	42	色	13	争	3	田	3	夫	43	門	1	岑	1	莫	32
園	1	逆	1	交	2	時	47	食	1	走	11	田	3	父	2	問	11	巖	2	菖	13
遠	43	久	3	光	11	辞	1	植	11	奏	1	伝	11	布	1	夜	75	廬	1	蒲	13
塩	1	及	11	向	15	七	1	殖	31	相	92	殿	11	附	13	野	72	廻	31	蘊	2
縁	11	弓	12	行	2	失	1	触	11	草	31	徒	1	負	11	弥	42	愍	1	蜻	1
王	12	丘	1	更	23	疾	1	心	11	挿	3	都	1	浮	11	友	1	怜	11	裙	1
往	23	泣	1	皇	54	執	1	申	11	掃	1	渡	15	腐	1	有	149	掛	1	裳	1
桜	1	宮	3	紅	23	夷	11	身	1	霽	12	塗	1	敷	21	遊	21	挂	1	襪	1
奥	21	去	69	荒	22	者	1	津	11	藻	2	度	2	部	21	雄	2	挹	1	谿	4
屋	103	居	33	香	21	射	1	神	76	造	1	刀	1	風	34	葉	43	捧	1	辟	11
音	35	虚	2	降	1	借	2	振	23	束	1	投	1	服	1	腰	1	撫	1	遙	12
下	22	許	3	黄	42	若	1	真	5	足	75	島	33	腹	1	養	1	攀	2	雁	2
火	1	魚	1	綱	1	手	57	深	2	息	11	桃	11	物	33	来	188	敲	1	雉	2
可	41	御	47	告	21	主	1	新	2	俗	1	等	71	文	1	落	71	斯	1	雖	32
何	2	共	21	谷	1	取	44	人	107	統	2	踏	21	聞	118	乱	1	於	3	霍	177
花	1815	狂	1	国	411	珠	15	尽	11	率	1	頭	4	平	15	里	21	无	12	霖	1
河	113	京	33	黒	11	酒	33	尋	21	村	1	藤	63	並	1	裏	2	旻	1	霞	22
科	1	恐	2	駒	1	種	11	水	44	尊	1	同	1	幣	1	履	1	暢	1	摩	13
夏	31	郷	1	今	83	寿	1	吹	41	打	1	道	31	別	81	離	5	李	1	鮎	1
家	24	鏡	2	座	13	秋	65	垂	11	隨	1	得	11	辺	53	立	1110	柏	1	鮪	1
過	23	鏡	1	座	45	袖	21	数	1	待	7	独	1	変	1	柳	31	梓	11	鮫	41
箇	1	響	22	妻	1	終	1	瀨	22	大	1410	内	11	母	3	流	3	梓	2	鷹	2
我	11	曉	22	細	1	十	23	是	22	大	75	難	1	墓	1	留	12	梳	1	鷓	21
芽	31	玉	66	埼	1	住	21	井	1	宅	1	二	1	暮	17	獵	2	梶	1	々	28
海	45	近	2	在	55	重	2	世	52	誰	3	日	1810	方	1	林	1	相	1		
開	73	金	1	作	1	従	2	正	1	丹	2	入	1	奉	11	輪	1	楊	11		
解	1	苦	1	咲	25	叔	11	生	22	旦	1	忍	1	放	3	累	2	榛	1		
外	1	遇	1	三	2	祝	1	成	51	嘆	3	年	165	峰	42	令	32	榴	11		
蓋	11	隅	1	山	1316	宿	21	青	23	男	1	念	169	豊	2	鈴	1	橘	36		
垣	1	君	165	参	1	出	32	逝	2	地	35	波	12	飽	13	零	12	櫛	11		

短歌と長歌との漢字のありかたの違いについて、本稿ではこれ以上に立ち入る余裕がない。言い出しておいて遺憾である。

短歌を記した漢字 出現 順位	頻度	累積 比率	漢字	
1	29	23.0	吾	(1字)
2	28	45.2	見	(1字)
3	19	75.4	公 不	(2字)
5	18	146.9	花 鳥 日 鳴 来	(5字)
10	17	160.4	霍	(1字)
11	16	198.5	君 年 念	(3字)
14	15	222.3	将 雪	(2字)
16	14	244.6	大 山 有 此	(2字)
18	13	265.2	河 聞 立	(2字)
20	11	291.5	屋 人	(3字)
23	10	307.3	戸 春 相 暄	(2字)
25	9	335.9	今 梅 別 情 神 足 待 代 天 等 夜 野 落	(4字)
29	8	355.0	為 開 玉 秋 皇 清 千 頭 白 始 可 手 海 御 八 成 経 悲 折 後 夫 知 朝 辺 恋 時 取 照	(3字)
32	7	421.7	引 水 吹 雲 清 越 頭 遠 如 子 遠 頭 常 始 可 白 藤 手 海 御 八 成 経 悲 折 後 夫 知 朝 辺 恋 時 取 照	(12字)
44	6	455.1	去 影 引 水 吹 雲 清 越 頭 遠 如 子 遠 頭 常 始 可 白 藤 手 海 御 八 成 経 悲 折 後 夫 知 朝 辺 恋 時 取 照	(7字)
51	5	510.7	浦 吹 雲 清 越 頭 遠 如 子 遠 頭 常 始 可 白 藤 手 海 御 八 成 経 悲 折 後 夫 知 朝 辺 恋 時 取 照	(14字)
65	4	612.3	水 吹 雲 清 越 頭 遠 如 子 遠 頭 常 始 可 白 藤 手 海 御 八 成 経 悲 折 後 夫 知 朝 辺 恋 時 取 照	(32字)
97	3	710.0	羽 殖 令 一 繼 借 盛 忘 纒 安 外 堅 寺 消 船 痛 附 腰 捧 篋	(41字)
138	2	856.2	音 草 廻 益 鷄 袖 石 本 雁 衣 蓋 古 辞 唱 然 庭 負 乱 敲 菖	(92字)
230	1	1000.0	夏 芽 還 久 宮 居 許 京 五 思 耳 酒 出 初 上 柳 近 事 青 部 爾 我 形 師 松 絶 通 布 問 挹 礪	(181字)

5 和訓の漢字の諸事象

以下、出現頻度が大きい漢字を個々に採り上げて、そこから漢字にかかわる問題を見る。正訓はあまり問題を抱えないが、いわゆる訓み添えを検討する。訓み添えという用語・概念は読む立場からのものであり、漢字の側に立つときには助辞吸収とでも言ったほうが適当であると思うので、そのように言う。義訓および漢文語順のものは一つ一つに就かざるを得ない。

見 —— 出現頻度が短歌で28 (2位) , 長歌で21 (1位)

これを仮名と処理することもでき、短歌の11度、長歌の12度がそれに当たる。漢字比率を引き下げる影響があり、引き下げ分は短歌で0.37%=11度/短歌文字延べ2965、長歌で0.43%=12度/長歌文字延べ2751、全体で0.40%=(11度+12度)/全体文字延べ5716である。40%前後のうちの0.4%前後というのは、大きくは見えない。一首あたりの漢字数の平均も引き下げ、引き下げ分は短歌で0.08字=11度/短歌数131首、長歌で0.91字=21度/長歌数23首である。漢字であるか仮名であるかを問題にしたときに、最大の分量になるのは恐らくこの「見」であり、他の同様のものを併せても、巻第十九の表記の全体を仮名主用と改めるには至らないであろう。

「み」と訓むものは短歌11件・長歌12件であり、次のような内訳である。

- ・ 動詞「見る」の未然形「見じ」「見らくし」「見らむ」 短歌各1
- ・ 同じく連用形および複合動詞前項 短歌7・長歌9
- ・ 同じく連体形「見る」短歌1、已然形「見れども」長歌1
- ・ 名詞「かた見<形見>」長歌1
- ・ 動詞「見ゆ」の未然形「見ユぬがゴトく」長歌1

靡きや助詞を吸収したのものも、短歌8件・長歌3件がある。

- ・ 動詞「見る」の連体形靡きを吸収して「みる」である短歌2・長歌1
- ・ 同じく已然形で「みれ」である短歌4・長歌2
- ・ 動詞「見る」連用形で助詞「て」を吸収して「みて」である短歌2

靡き・助詞を分離している事例と、吸収した事例とを挙げる。ここでは漢字

「見」を「〇」に置き換え、また、長歌で前後を省略して「…」とする。

4199 藤なみの 影成<なす>海ノ 底清み しづく石をも 珠トゾ吾<あが>〇る

4214 … 真<まそ>鏡 〇れドも不飽<あかず> 珠<たまノ>緒ノ
惜<をしき>盛<さかり>に …

4201 いささかに 念<おもひ>て来<コ>しを たこの浦に
開<さけ>る藤<ふち>〇て 一夜可経<フぬブシ>

4186 山吹を 屋戸<やど>に殖<うゑ>ては 〇<みる>ゴトに
念<おもひ>は不止<やまず> 恋<こヒ>コソ益<まさ>れ

4142 春<はるノ>日に 張<はれ>る柳を 取持<とりもち>て
〇<みれ>ば京<みやこ>ノ 大路<おほぢし>所念<おもほゆ>

4269 ヨソノミに 〇<みて>は有<あり>しを 今日〇<みて>は
年に不忘<わすれず> 所念<おもほユむ>かも

漢文の語順によったものとして、短歌6・長歌4件がある。

- ・ 「不見」で助動詞「ず」を随えた「みず」を記し、二字で連用修飾「みず」短歌2，連体修飾「みぬ」短歌1
- ・ 「将見」で助動詞を随えた「みむ」を記し、二字で終止「みむ」短歌1，連体修飾「みむ」長歌1
- ・ 「毎見」で連用修飾「みるゴトに」長歌2
- ・ 「所見」で動詞「見ゆ」を記し、二字で未然形「みユ」短歌1，終止形「みゆ」短歌1，連体形で靡きを吸収して「みゆる」長歌1

4170 白玉ノ 見<み>がほし君<きみ>を 丕〇<みず>久<ひさ>に
夷<ひな>にしをれば いけるトもなし

4226 此雪ノ 消遣<ケノコる>時に 去来<いざ>帰<ゆか>な
山橋ノ 実<ミノ>光<てる>も将〇<みむ>

4185 … 引攀<ひきヨぢ>て 折<をり>も不折<をらず>も 毎〇<みる>ゴトに>
情<ココロ>なギむト …

4259 十月<かむなづキ> しぐれノ常か 吾<わが>せこが

屋戸<やど>ノ黄葉<もみちば> 可落<ちりぬづく>所〇<みゆ>

以上の「見る」「見ゆ」の一群に対して、「めす」も漢字「見」の正訓である。「めす」の語幹のみ「め」短歌2・長歌1, 語尾を含む連用形「めし」長歌1がある。

4267 すめ口きノ 御代万代に 如是<かくし>コソ 〇<め>しあきらメメ
立<たつ>年ノ葉に

4254 … 秋<あきノ>花 しが色々に 〇賜<め<u>したまひ>
明<あきら>メたまひ …

次の短歌の「御見<めし>」は、漢字と訓とが一一对応をせず、義訓と考える。

4228 有<あり>つゝも 御〇<めし>たまはむゾ 大殿ノ 此もトほりノ
雪なふみソね

漢字「見」の詳細は以上である。短歌・長歌のそれぞれの出現頻度を示したが、特段の違いはないと言ってよいであろう。

吾 —— 出現頻度が短歌で29 (1位), 長歌で9 (13位)

仮名主用表記諸巻にも少なからず出現し、この巻第十九でも特に短歌で大きい。後世の和歌表記には伝わらず、万葉集らしい漢字である。

- ・ 主格「わが」短歌8, 連体修飾「わが」短歌9・長歌6
- ・ 代名詞「わ」短歌1 (4218 〇が下念<したもひ>を)
- ・ 代名詞「われ」短歌4・長歌2
- ・ 主格「あが」短歌3
- ・ 複合名詞「吾子<あこ>」で短歌1 (4240 此<コノ>〇子を)

次は義訓である。

- ・ 「吾等」で主格「わが」短歌1 (4234 〇等立<たち>かてね)
- ・ 「吾等」で代名詞「われ」短歌2 (4157 〇等眷<かへりみ>む)
- ・ 「吾妹子」で複合名詞「わぎもこ」長歌1 (4156 〇妹子が)

以上の事例は簡略に留めた。漢字「吾」は「〇」に置き換え、それが見られる句のみ取り出した。「吾等<われ>」ではいま1例 (4191) も省略している。

同義の漢字「我」は、連体修飾「わが」（短歌4176 ○門<かど>ゆ）・主格「あが」（長歌4154 すゑてゾ○飼<かふ>）各1例である。

花 —— 出現頻度が短歌で18（5位），長歌で15（3位）

短歌・長歌ともによく出現していて、しかもほとんど一様であり、正訓「はな」である。

- ・ 単純名詞「○<はな>」短歌14・長歌10
- ・ 複合名詞「○橘<はなたちばな>」短歌1・長歌3，
「○蘊<はなかつら>」短歌1，「始○<はつはな>」短歌1，
「春○<はるばな>」長歌2

単純名詞で助詞「の」を吸収した「花<はなの>」短歌1が、例外的にある。

4188 藤なみノ ○盛<はなのさかり>に 如此<かくし>コソ 浦コぎ廻<ミ>つつ
年にしのはメ

山 —— 出現頻度が短歌で13（18位），長歌で16（2位）

短歌・長歌ともによく出現し、ほとんど正訓「やま」である。複合名詞が多い。

- ・ 単純名詞「○<やま>」短歌3・長歌5
- ・ 複合名詞「○辺<やまへ>」「○道<やまち>」短歌各1，
「○下<やました>」「○河<やまかは>」「○坂<やまさか>」長歌各1，
「○橘<やまたちばな>」「○霍公鳥<やまほととぎす>」短歌各1，
「○吹<やまぶき>」短歌3，「○振<やまぶき>」長歌1，
「島○<しまやま>」短歌1・長歌1，
「奥○<おくやま>」短歌1，「繁○<しげやま>」長歌1，
「と波○<なみやま>」「蓋上○<ふたかみやま>」長歌各1

・ 地名「○<やま>トノ国<<くに>」長歌2，「○跡国<やまとノくに>」長歌1
最後の「山跡国」については、漢字と仮名との分別について最初に触れたところにも記した。ただし、漢字「山」の直接の問題ではない。

単純名詞で助詞「の」を吸収した「山<やまの>」短歌1がある。

4225 足ひキノ ○黄葉<やまノもみち>に しづく相<あひ>て

将落<ちらむ>山道<やまち>を 公<きみ>が超<こユ>まく

鳥 —— 出現頻度が短歌で18 (5位) , 長歌で11 (5位)

漢字としての出現頻度は大きいですが、正訓「トリ」とはさほど結び付かず、多くは義訓「霍公鳥<ほトトギス>」のために費やされている。

- ・ 正訓, 単純名詞「○<トリ>」長歌3, 複合名詞「水○<みづトリ>」短歌1
- ・ 正訓, 複合名詞「○座<トくら>」長歌1。
- ・ 義訓, 名詞「霍公○<ほトトギス>」短歌16・長歌7,
複合名詞「山霍公○<やまほトトギス>」短歌1

このうちの名詞「鳥座<トくら>」を正訓としたことには、異論が出るかもしれない。「4154 つま屋ノ内に ○座<トくら>ゆひ すゑてゾ我<あが>飼<かふ>真白ふノたか」である。卷第十九では、漢字「鷹」短歌2 (138位) が、正訓「たか」のほかに、「始鷹獵<はつとがり>」 (4249) で「ト」を得ている。

なお、漢字「公」短歌19 (3位) ・長歌7 (22位) は、「霍公鳥<ほトトギス>」のほかに、名詞「公<きみ>」短歌2で出現するばかりであって、その一例は、すぐ上、漢字「山」の項目の最後に引用した4225番短歌のうちに見える。

また、漢字「霍」短歌17 (10位) ・長歌7 (22位) は、専ら「霍公鳥<ほトトギス>」のために出現している。

不 —— 出現頻度が短歌で19 (3位) , 長歌で12 (4位)

ほとんど、漢文の語順で記した部分のものであり、助動詞「ず」に対応する。

- ・ 「○相問<あひとはなく>に」短歌1

活用形「ず」は多くは連用形中止であるが、終止形であるに見えるものもないではない。ここでは分離しない。

- ・ 「○足<あかず>」短歌1, 「○飽<あかず>」長歌1,
「○怨<うらみず>」長歌1, 「情<ココロ>○障<さやらず>」長歌1,
「○為<せす>や」短歌1, 「○見<みず>」短歌2,
「年に○忘<わすれず>」短歌1,

「念<おもひ>は〇止<やまず>」短歌1・長歌1,

「折<をり>も〇折<をらず>も」短歌1・長歌1

複合助辞もある。

- ・ 「〇植<うゑず>て」短歌1

次は連体形「ぬ」である。

- ・ 「〇相<あはぬ>日」短歌2, 「〇遇<あはぬ>日」長歌1,
「〇聞<きかぬ>日」長歌1,
「〇見<みぬ>人」短歌1, 「〇告<つげぬ>君かも」短歌1,
「〇零<ふらぬ>雪ゾ」長歌1

次は返り読みを重ねている。

- ・ 安寐<やすい>〇令宿<ねしめず>」長歌1 (4177)

次は複合動詞の漢字表記に割り込んでいる。

- ・ 「雖聞<きケド>飽〇足<あきたらず>」短歌1 (4176)
- ・ 「までト来〇鳴<きなかぬ>霍公鳥<ほととぎす>」短歌1 (4208)

次は仮名で再度記している。

- ・ 「〇知<しら>に」短歌2 (4195・4202) ・長歌1 (4236)

次は義訓と見るのがよいかもしいが、漢字が分離している。

- ・ 「〇超来有<こユコざら>メヤ」短歌1 (4145)

次は義訓である。

- ・ 「〇怜<さぶし>も」短歌1 (4178) ・長歌1 (4177)
- ・ 助動詞「き」を吸収して「留〇得<トドメかねき>ト」長歌1 (4214)

将 —— 出現頻度が短歌で15 (14位), 長歌で6 (33位)

やはり漢文の語順で出現し, 多くは助動詞「む」に対応する。

- ・ 「〇語<かたらむ, 終止>」短歌1, 「〇落<ちらむ, 連体>」短歌1,
「啼<ね>にしも〇哭<なかむ, 連体>」短歌1,
「〇吹<ふかむ, 準体>を」短歌1, 「〇待<またむ, 終止>」短歌1,
「〇去<ゆかむ, 終止>」短歌2, 「〇因<ヨらむ, 連体>」短歌1,

「○別<わかれむ, 係結連体形>」短歌1, 「○別<わかれむ, 連体>」短歌1,
「○見<みむ, 終止>」短歌1, 「○見<みむ, 連体>」長歌1,
「○飽足<あきたらむ, 終止>」長歌1,
「○有<あらむ, 終止>」長歌1, 「○有<あらむ, 準体>を」長歌1,
「○言<いはむ>すべ」長歌1, 「○作<せむ>すべ」長歌1

次は已然形である。

- ・ 「○忘<わすらユメ>やも」短歌1 (4248)

次は直前に助動詞「ぬ」未然形「な」があり、漢字「将」は複合助動詞「なむ」であるかもしれない。

- ・ 「ほにか○出<いでなむ, 係結連体形>」短歌1 (4218)
「まづ○喧<なきなむ, 準体>を」短歌1 (4183)

また、助動詞「らむ」がある。

「鳴<なき>か○超<こゆらむ, 終止>」短歌1 (4195)

なお、上に漢字「見」を見たときに、漢文の語順で出現しているものとして、「所」「毎」も関係していた。他に「可」「令」「无」などもあり、珍しく感じられる「経年<トしふれ>ば」短歌1 (4173) もある。

漢字個別については、取り上げるべきことが多い。訓み添えについて、漢字間で行われると初めに言って、漢字・仮名の判定を行ったが、前提が正しいかどうかは、巻第十九のうちのみでも全体的に見直さなければならないかもしれない。助詞「の」についてはその前提が成り立つとしても、助詞「に」についてはどうであるか、分からないのである。また、漢文の語順の最後に添えたように、一つの漢字に幾つかの漢字が関係していて、それらの背景にも配慮することが求められ、その延長上では、語句の表記という観点から、仮名表記あるいは訓み添えのものも含めて、検討することも求められる。その上で、漢字の地位というものが知られることになるであろう。今回は、漢字を一二眺めるところまで来たということにする。

参考文献

古屋 彰（1998）万葉集の表記と文字。和泉書院，研究叢書 215。

築島 裕（1984）万葉集の動詞の語尾表記について。

万葉集研究 12 pp.291-314。

漢字個々の記述に当たっては，この築島論文ほか，参照・言及しなければならない文献は多い。しかし，今回，築島論文を含めて，全く言及しなかった。遺憾とする。